

剥製標本が作り出す空間 ウィーン自然史博物館2

延原尊美



1：偶蹄類展示コーナーの剥製標本。ガラス越しに息遣いが感じられるほど。



2：剥製技術の進歩にはハンターのトロフィー製作という背景があった。

ウィーン自然史博物館の動物展示室には、圧倒的な数の剥製標本が分類群ごとに並べられている。世界中のありとあらゆる種類がそろっていることにも驚かされるが、舌を巻くのはその保存状態の良さである。博物館創立から考えると作られてからおそらく150年以上の時間が経っているものもあると思われるが、剥製とは思えない質感、いまにも動き出しそうな躍動感がガラスケース越しに伝わってくる。たくさんの剥製に囲まれた展示室に入ると、あたかも時間の止まった動物園に迷い込んだようにも感じられる。その中には、人類によって滅ぼされたドードーやフクロオオカミ（タスマニアタイガー）、オカピのような絶滅危惧種なども含まれ、今となっては失われた生物多様性のタイムカプセルのようでもある。こうした大量の剥製を目の前にすると、人類の犯した業を感じながらも、また他方では後世に残された自然遺産として、その価値を見つめ直す大切さを思う。標本たちは、人間の営みと地球の生きもののつながりを未来に向かって問いかけている。

剥製標本とは、動物の屍体の中身を取り除き、防腐処理をしたのち、詰め物をして生時の姿に復元したものをいう。展示用・鑑賞用の本標本と、学術上使用される仮標本

(簡易標本)がある。剥製技術(taxidermy)はいついっつごろから始まったのだろう? 防腐処理を施すという点ではエジプト王朝のミイラの製作にまでさかのぼるが、自然史コレクションのキャビネット展

示のための剥製は18世紀に始まる。19世紀に入ると、剥製が室内装飾品として一般化し、ハンターがしとめた獲物をトロフィーとして加工する業者によって剥製技術の発展は黄金期を迎える。19世紀半ばには、現代の剥製技術の父とよばれるJohn Hancock（イギリスの鳥類学者）が、ロンドンでGreat Exhibitionを製作し、生息時の様子を表現した展示方法で当時の大衆の興味を大いに掻き立てた。以後、剥製はハンティングのトロフィーとしての象徴から、科学の標本という別の価値を持つことになる。当時、標本の収集に大きな貢献をした博物学者の中には剥製技師もいた。フランス I 世統治の時代、18年間にわたってブラジルからウィーンに動物標本を送り続けたヨハン・ナテラーもその一人である。19世紀おわり（1872年）に設立されたウィーン帝国自然史博物館は、このような剥製技術の進化と併走する形で、準備され産声をあげたことになる。

収集された動物標本を長期にわたって保存する剥製技術とそれを維持する博物館という組織がほぼ同時代に成熟していったという巡り合わせは必然なのかもしれない。だが、現代の自分たちはそれを幸運としてもっと感謝してもよいのではと思う。人間は多くの動物を絶滅に追いやってしまったが、この躍動感あふれる剥製標本で囲まれた空間が、生時の姿を半永久的に人類の記憶にとどめる遺産として残され、自然史を知る大切さを語りかけてくれる。

ガラスケースの中の標本には距離感を感じる方もおられるかもしれない。しかし、ガラスケースの中で維持されている質感は、距離感を補って余りある感動を150年近くにわたって人々に与えてきた。その時代に人間が遭遇した自然を、「標本」という形で半永久的に人類の遺産として維持し、蓄積し、研究を続けていく。標本をめぐる営みこそが、自然史博物館の「魂」である。

なお、ウィーン自然史博物館を訪問した時、特別展「Die präparierte Welt（プレパレーションの世界）」が半年間にわたって開催中で、解剖道具や製造工程が展示されていた。期間中は、家族や子ども向けに、標本作成（プレパレーション）に関する様々な体験プログラムが定期的に組まれていた。標本作成は確かにプロフェッショナルな仕事で、科学でありアートでもある。またその一方で、子どもたちにとっては自然史への入り口ともいえる。標本をつくり分類しラベルをつけることは、人間が自然界をどのようにとらえていくのかという果てなき道のりにおいて、実物に対峙する出発点であるのだから。



3：キウイの剥製を用いた生態展示。食事、営巣、子育ての様子が伝わってくる。



4：地下鉄駅構内の特別展の広報。ポスターの背景は剥製に入れる様々な動物の偽眼。